



太平記 邑楽英雄列伝

MACHIKADO REPORT No.186
街角特派員レポート

乱世を駆け抜けた英雄たちの武勇伝

乱世を駆け抜けた英雄たちの武勇伝に迫る

郷土の歴史を知りたいという思いから

歴史に名高い、新田義貞

ここで、群馬県に住んでいる皆さんは小学生からご年配の人まで多くの人が、ご存知の文だと思えます。そう、これは上毛かるたの「れ」に当たる鎌倉時代に活躍した武将、新田義貞を紹介した文です。その新田義貞に比べ、戦乱を駆け抜けた武将たちが、ここ邑楽町にもいました。そして、今現在もまだその武将たちゆかりの場所は残っています。私も最近入づてに、この武将たちの存在を知りました。はじめあまり興味はなかったのですが、関係する本を読み進んでいくうちに、あの「太平記」にまで名を連ねていた武将だと知ることができました。ゆかりの場所には、エピソードとともに関心する内容も残っています。



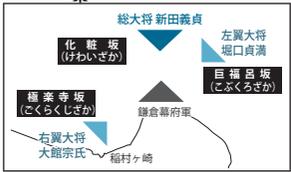
県民なら誰でも知っている「上毛かるた」

私自身もあまり詳しく知らない郷土の歴史、今回テーマとして歴史的戦いの中に身をおいた武将たちに焦点をあてたのも、もともと郷土の歴史を知り、今までのただ古い建物があるなというだけの視点から、実はとても歴史的価値のあるもの

新田軍 VS 北条軍 (鎌倉幕府軍)

↑一寿斎芳員筆「新田義貞鎌倉合戦」(太田市立新田図書館所蔵)

「鎌倉合戦」戦況図

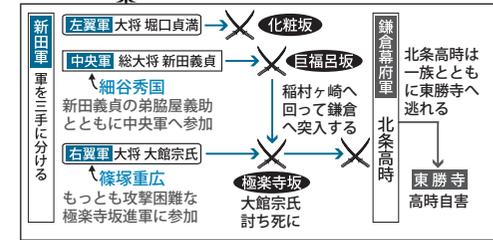


生品神社にあった新田義貞の銅像

▲新田義貞の銅像は、何者かに盗まれ、現在は生品神社に存在しない

稲村ヶ崎の伝説
極楽寺坂を突破した夜、月の光に極楽寺坂を見渡すと、北は切り通しまで山高く、数万の兵が陣を並べ、南は稲村ヶ崎の砂浜は狭く、幕府軍の兵船が沖に連なり、鎌倉に攻め入るすきもなかった。義貞は、馬からおりて甲をぬぎ、海上はるかに伏し拝み、「潮を退けて道を三軍に開かしめ給へ」と龍神に祈って黄金作の太刀を抜いて海中へ投げ入れた。すると不思議にも、稲村ヶ崎の二王口ばかりが干潟となり、新田軍はそこを渡って、いつせいに鎌倉へ攻め入った。

鎌倉合戦フローチャート



新田義貞軍は稲村ヶ崎の干潟を渡って、鎌倉へと攻め入った



新田軍の侵攻経路

三武将、風雲急を告げる 鎌倉合戦に参陣!

- 新田四天王 篠塚伊賀守重広
- 忠義の武将 中野藤内左衛門景春
- 武略の名将 細谷右馬助秀国

「郷土の歴史を知りたい」、そんな思いから、今回の街角特派員レポートに取り組みました。を見ているのだという視点に立ちたいと思っただけです。さあ皆さん、私と一緒に太平記の英雄たちの足跡をたどってみませんか。



街角特派員 岩松雄志 (大根村琵琶町10区)

新田軍

鎌倉幕府討幕を目指し、三武将が生品神社へ集結、いざ鎌倉へ。

三武将の出陣

元弘三年(一一三三)五月八日午前六時、清和源氏新田義貞は生品神社(太田市新田)で鎌倉幕府討幕の兵を挙げました。新田氏の大甲黒の旗を掲げ、後醍醐天皇から下された繪旨(勅命の文書)を拝読。集結した一五〇騎とともに先祖新田義重の霊を祭った寺尾城跡の笠懸野へ出陣。

この新田軍に細谷秀国、中野景春・弟の義春、篠塚重広が参陣していました。新田軍はまず、北条方の上野国守護代の長崎孫四郎高貞を新田庄世良田で打ち破りました。新田軍は、上野国内から参陣



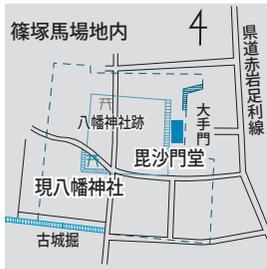
▲新田義貞の像 (東京都府中市分倍河原駅前)



新田義貞による鎌倉幕府討幕の旗挙げが行われた生品神社(太田市新田)



現在の毘沙門堂（篠塚馬場）



現在の八幡神社（篠塚馬場）



●新田軍 VS ●足利軍

新田軍は、その上を渡って攻め入り、大勝しました。もともと大卒塔婆を引き抜き、向こう岸へ倒し、橋にしてみました。新田軍は、その上を渡って攻め入り、大勝しました。

出してしまつたのです。重広は、倒した敵兵を積み重ねて、味方がくるのを朝まで待っていたといひます。夜が明けて、義貞がこの騒動の報告を受けると、重広の武勇に大いに感心したと同時に、そのあまりの強さに、あきれはてました。

五月十八日、新田軍の鎌倉総攻撃は、巨福呂坂・化粧坂・極楽寺坂の三手に分かれて開始され、重広は一番難所の極楽寺坂方面の攻略を担当する大將大館宗氏の軍に参加しました。ところが、十九日早朝、極楽寺の切り通しを突破した大館宗氏が、討ち死にするという事態に陥り、重広は援軍に来た義貞の本隊に参加し、稲村ヶ崎から鎌倉に入り奮戦します。

箱根竹ノ下の合戦に敗れて伊豆の国府へ向かう途中、足利軍の一条次郎という者が新田義貞を見つけ、馬を走りよせ太刀を引き抜いてきました。重広がとっさに間に入って、一条が振り下ろす太刀を左手の袖で受けとめ、つかんで投げ飛ばし、一条を大力の早わざで、倒れずに踏みとどまり、よるめく足を踏みとどめ、なおも義貞に走りかかろうとしてきました。それを見た重広は馬から飛んで降り、両ひざを合わせて、さかさまに蹴倒して、起き上がろうとするところを押さえつけ、一条の首をとりました。

一条の家臣たちは、目の前で主人を殺され、重広を討とうと襲いかかってきました。ところが、重広はかけ違つては蹴倒して、蹴倒してはかけ違ひ、たちまち九人までも討ちとりました。これを目の当たりにした足利勢の中からは、重広に戦いを挑む者が、だれもいなくなつてしまつたといひます。

歌川國芳筆「三井寺合戦」(大信寺所蔵)



重広は「卒塔婆を立てるも、橋を渡すも功德は同じ」と言つて、大卒塔婆を引き抜いて橋を架けたといひます。当時、橋を勸進(寄附)するのは、大きな功德だった。

三井寺の合戦

篠塚伊賀守重広の奮戦！

建武三年(一三三六)一月十六日、新田軍は足利方の細川定禪が立てた三井寺(滋賀県大津市)の攻撃を開始しましたが、定禪が木戸を開き、掘にかけてあつた橋を引き外してしまつたため、攻めあぐんでいました。義貞の弟脇屋義助は、いらだつて「頼りないぞぞぞだ。たつた一つの木戸のために、こんな小さな城を攻め落とせぬ」といふことがあるか。栗生、篠塚はおらぬか、あの木戸を引き破れ。畑、巨理はおらぬか、切つて入れ」と命令しました。

すぐさま重広と栗生が馬から飛んで降り、木戸へ走り寄つて見ると、堀の前には深い掘があり、その兩岸は切り立つていて、橋板はみなはずされ、橋桁だけ残つていました。篠塚、栗生は、どうしてここを渡るかと思索して左右を見ると、近くの塚の上に高さ約18メートルにもなる大卒塔婆が立っていました。「これはちよどよい橋板」とばかりに二人は走り寄つて、かけ声もろとも大卒塔婆を引き抜き、向こう岸へ倒し、橋にしてみました。新田軍は、その上を渡って攻め入り、大勝しました。

篠塚伊賀守重広

新田四天王と呼ばれし
天下無双の豪傑

Shinozuka Iganokami Shigehiro

しのづかいがのかみ しげひろ



天下無双の豪傑出陣

篠塚重広、鎌倉合戦に参陣！

天下無双の武將篠塚重広は、邑栗町篠塚の馬場にあつた篠塚城五代城主でした。元弘三年(一三三三)新田義貞が清和源氏の棟梁(統率者)として後醍醐天皇から綸旨(勅命の文書)を受け、鎌倉幕府を討つ旗挙げを、郷里の新田庄生品明神で行つたとき、重広は篠塚城から馳せ参じています。これは篠塚氏の先祖山重忠が、無実の罪を着せられて元久二年(一二〇五)六月二十二日、北条義時のために武蔵国二俣川(今の横浜市旭区)で討たれた雪辱を晴らすために、参陣し

たといわれまふ。

五月十一日、新田の軍勢が、小手指原(埼玉県所沢市)まで進軍すると、北条方の大將金沢貞将率いる幕府軍と遭遇合戦となりました。その日の夜、重広は義貞にすぐに夜討ちをかけるべきと進言しましたが、明け方の決戦にこだわった義貞は、この作戦を聞き入れませんでした。そこで重広は単身敵陣に忍び込み、北条軍の番兵に本陣はどこにあるのかとたずねました。すると突然、襲いかかってきたので、重広は鉄撮棒を打ち振るって、たちまちのうちに、二十人ばかりの兵を打ち倒してしまいました。この騒ぎに敵陣は夜討ちと思ひこみ、後方の陣へ逃げ

鉄撮棒

かなさいぼう

新田四天王、篠塚伊賀守重広必殺の武器

新田四天王

篠塚伊賀守重広
しのづかいがのかみしげひろ

栗生左衛門頭友
くりうざえもんあきとも

畑六郎左衛門時能
はたるくろうざえもんときよし

由良新左衛門具滋
ゆらしんざえもんともしげ

長さ八尺(約2.4メートル)の金棒。重広は、この金棒をやすやすと持ち上げ、戦場を自由自在に走りまわり、敵をなぎ倒した。



伊賀守の勇力(新田世忠記)

夜光瓢 やこうひさご

重広の豪傑ぶりを伝える品

酒が五升入る瓢(ひょうたん)。重広は合戦のたびごとに、この夜光瓢を携えて、七合入る杯で酒を飲んだという。戦いの最中は、木曾山中の山賊討伐をきっかけに飼うことになった木曾虎という愛犬に番をさせておいたという。



福岡県福岡市星野家所蔵



二代目歌川國芳筆「篠塚伊賀守」(大信寺所蔵)



沖島（愛媛県旧島村、現上島町）にある篠塚伊賀守の宝篋印塔（ほうきょういんと）。その昔から篠塚伊賀守の墓と伝えられています（写真提供・岡田真幸さん）

関東帰還
篠塚伊賀守、一鬼入道と名を改める

因島（広島県尾道市）へ渡った篠塚伊賀守は、島の南端の岬城の城主となりましたが、興国三年（一三四三）五月九日に足利軍の攻撃に遭い、城から脱出。沖島（愛媛県上島町）へと逃れました。沖島滞居後、村上水軍の助力により、瀬戸内から船で利根川河口の波崎（茨城県神栖市）に上陸。ところが、関東一円が足利方の支配下になったのを、身をもって知った伊賀守は、茅原（東京都台東区）の里にとどまり、稲荷社の傍らに庵を結んで、名を一鬼入道と改め、その後しばらくして、茅原の里を跡にしました。遠く隠岐島を目指して…。

隠岐島の海上刈田、島根県隠岐郡海士町）の村上水軍の本拠を訪ねた一鬼入道は、当主の村上助九郎と出会う。そこで筑後（福岡県）の星野氏と肥後（熊本県）の菊池氏が、征西將軍懐良親王を支え、南朝のために尽力していることを聞き、すぐにでも星野氏を訪ねたいと思いつき、一路筑後へと再び旅立ったのです。

年（一三三九）八月十六日、崩御され、後村上天皇が南朝の皇位につきました。興国二年（一三四一）九月、根尾城が足利方の土岐頼遠に攻められ、脇屋義助軍は尾張へ退却。敗軍の兵を集めて伊勢・伊賀を経て、南朝のある吉野へ参内。義助は後村上天皇に拜謁し、藤島での義貞戦死の状況などを報告しました。興国三年（一三四二）四月一日、大将脇屋義助は勅命を受け、篠塚伊賀守等に従えて四国・伊予（愛媛県）方面の南朝方勢力の増強を目指し吉野から出陣。四月二十三日には伊予へ上陸して国分城へ入りました。ところが、不運にも義助は発病し、五月十一日には死去します。

永遠の眠り
戦いに明け暮れた生涯に幕を閉じる

篠塚一鬼入道が筑後国星野の妙見城に到着したのは、正平二十年（一三六五）十月二十七日のことでした。一鬼入道は、星野氏とともに征西將軍のために忠勤を励むことを誓い、九州の地で数々の戦歴を重ねます。征西府と足利方の合戦が続きましたが、元中九年（一三九二）十月ついに南北朝の和平が成立します。応永九年（一四〇二）二月二十日、千代田（福岡県朝倉市）の飯住まいにいた篠塚一鬼入道は、いつものように朝早く起きて沐浴をすると、東方に向かって光を拝み、吉野をはるかに拝してから、裏山の長慶法皇（吉野朝三代の天皇）の御陵を拝し、新田義貞一門の霊に経を手向けました。そして、末子篠塚房五郎重運に対して遺言した後、辰の上刻（午前八時）安らかに永眠しました。年九十三。戦乱を駆け抜けた波乱に満ちた生涯に幕を閉じたのです。



茨城県神栖市にある碓石（いかりし）。篠塚伊賀守が、瀬戸内から村上水軍の助力で関東に帰還したときに、乗船していた船の碓石と伝えられています（写真提供・岡田真幸さん）



大信寺住職 岡田真幸さん（寺中・26区）

太平記に登場する豪傑が、この邑楽町出身ということを知ってほしいですね。

当寺の北には伊賀守の御廟があり、宝篋印塔が祭られています。宝篋印塔には、「大信寺殿智証大禪定門」、暦応三年（一三四〇）五月六日と刻まれています。「暦応」は、北朝側の元号で、南朝側では「興国」が、その元号にあたります。おそらく、篠塚の地は足利氏（北朝側）の勢力だったので、元号「暦応」を使うしか方法がなかったのでしょう。南北朝動乱の後、足利氏の室町幕府となつてからは、南朝にゆかりのある人々は世を忍ぶ存在になりました。ですから、南朝の伊賀守の墓も郷土の人たちや子孫たちによって、この地にささやかに造られ、傍らに山神の社を祭って、ひそかに供養が営まれるようになり、江戸時代には山神さまのお祭りとして、地元の人々の年中行事になったようです。



石造の宝篋印塔に証は、「大信寺殿智証大禪定門」、五月六日と刻まれています



廟印の徳神んで伊賀守「山並」が並ぶ「山宮」す篠塚は「宮まい」墓塔石とい

篠塚伊賀守重広は、太平記に七回も登場し、新田義貞配下の武将の中で、もっともその名を馳せています。江戸時代には、その人氣から錦絵に描かれたり、歌舞伎のテーマになったりもしています。伊賀守を古代中国の三國志の関羽になぞらえた「篠塚五関破」という歌舞伎まであったそうです。

南北朝動乱の中で、百戦錬磨の豪傑篠塚伊賀守重広の活躍は、痛快きわまりなく、また乱世のはかなさも感じるすることができます。ぜひ、より多くの町民の皆さんに、この邑楽町出身の武將、豪勇篠塚伊賀守を知ってほしいですね。

篠塚伊賀守重広の菩提所大信寺



歌川國芳筆「篠塚伊賀守重広沖之島に渡る図」（大信寺所蔵）

世田山城の陥落後、脱出した篠塚伊賀守は、因島・沖島へと渡り、村上水軍の助力で瀬戸内から関東へ帰還する。しかし、そこで待ち受けていたのは、すでに足利勢力の支配下となつた世であつた…。

世田山城陥落
戦場にただ一人立つ！

当時、伊予の守護を南朝より任されていたのは大館氏明で、義助亡き後、氏明が大將となり、世田山城（愛媛県西条市）を守備。篠塚伊賀守は副将として世田山の搦め手（後ろ側）にあたる笠松城を守

することにしました。一方、脇屋義助の死を知った足利方の細川頼春は、大軍を率いて伊予へ出陣。その後、大館氏明がこもる世田山城、篠塚伊賀守が守る笠松城へ押し寄せてきました。興国三年（一三四二）九月三日、激戦の末、大館氏明主従十七騎は自害して果てました。このように南朝方の人々が自害する中、世田山城救援に馳せ参じた篠塚伊賀守ただ一人は、大手の一、二の木戸を押し開き、出で立ちました。細糸の鎧に龍頭の甲の緒をしめ、四尺三寸（約1.29メートル）の太刀を持ち、八尺（約4メートル）あまりの金指棒を小脇にかかえ、「新田左中將殿に、騎当千とたのまれし、篠塚伊賀守という者ここにあり。討つて勲功にあずかれ！」と大音声を張り上げて、敵中に突入していきました。敵も、新田軍でその武名を轟かせた伊賀守を討ち取ることであれば、大変名譽なことにできるので、追いかけて何度か戦いを挑みましたが、討ち取ることはできません。こうして篠塚伊賀守は、世田山城を脱出して六里（約24キロ）の道のりを二百騎あまりの敵兵に送られて、その日の夜半に今張浦（今治市）へ着き、船に乗って一路、因島へ向かったのです。



世田山城周辺の城

篠塚伊賀守、新田義貞亡き後も戦いに身を投じ忠義を尽くす…。

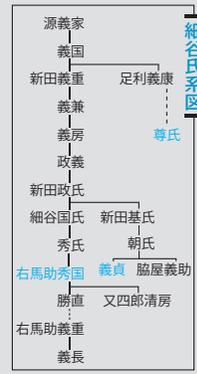
延元三年（一三三八）七月二日、新田義貞が戦場で散つた…。主君亡き後も篠塚伊賀守重広は南朝のために戦い続けた。しかし、情勢は南朝方に不利になる一方だった…。

合戦に次合戦

秀国、常にその身は戦場にあり

秀国は、清和源氏新田一族で新田五代政氏の長男国氏の孫です。八代新田義貞とは、ほとんどこになります。秀国の祖父国氏は長男ですが、新田庄細谷に分家して細谷氏を称し、弥太郎国氏と名乗り、その子が秀氏、秀氏の長男が秀国となりました。元弘三年（一一三三）、新田義貞が鎌倉幕府討幕の旗挙げを行うと、秀国も新田一族として最初から参画。鎌倉幕府滅亡後、恩賞の沙汰があり、「右馬助」の称号が与えられ、越後の新所領が新田庄細谷領に加えられました。

一方、足利尊氏は建武政権の恩賞に不平を抱く武士たちを集め、建武二年（一一三五）八月、突然朝廷に反旗を翻しました。これを受け同年十一月、後醍醐天皇は義貞に尊氏追討を命じ、秀国も追討軍に参加。その後の箱根竹ノ下合戦、京都攻防戦と戦歴を重ねることになります。京都攻防戦の後、尊氏は九州に敗走。後醍醐天皇は、この機に乗じ、足利方の勢力を一掃するため北畠顕家を奥州へ、新田左馬助義氏には篠塚伊賀守重広を伴わせ東海地方へ、細谷右馬助秀国と畑六



新田庄細谷領にあった新田氏ゆかりの冠稲荷神社

郎左衛門時能を差し向けました。

ところが、秀国が北陸道の備えに当たっている間、九州へ敗走したはずの足利尊氏が、勢いを盛り返して水陸から京都へ攻め上って来たのです。これを迎え撃つ新田義貞と楠木正成は兵庫の合戦に敗れ、正成は湊川で戦死、義貞も京都へ撤退。これを追って尊氏も京都へ入り、北朝の光明天皇を立てて、後醍醐天皇に対抗しました。

延元元年（一一三六）十月十日、足利尊氏は計略により和睦を申し入れ、後醍醐天皇は山門から都に帰ることになりました。一方、新田義貞は皇太子恒良親王・尊良親王を奉じて、北国の金崎城（福井県敦賀市）へ入りました。ところが、天皇が都へ帰る途中、尊氏の弟足利直義に捕らえられて、花山院に押し込められてしまっています。十二月二十一日、天皇は花山院から脱出、吉野へ移り、吉野朝が成立。これより北朝に対して南朝と呼ぶようになります。

延元二年（一一三七）三月六日、金崎城は足利方の総攻撃に陥落。新田義貞と弟脇屋義助は援軍を求めるため、廬山（福井県南条郡）へ脱出。廬山の義貞のもと

へは、敗軍の兵などが各地から集まり、たちまちその勢力は三千になりました。この動きを察知した足利尊氏は、高経を大将に軍勢を国府（福井県越前市）へ差し向けました。秀国は別動隊として、越後から北陸道の鎮定に当たっていました。越後から義貞の本軍の廬山後詰めとなって加賀から越前へ軍を進め、高経の国府へ迫りました。この時、秀国は加賀・越前の武士たちを集めて、三千余騎の大將となり、北陸道を押さえ、廬山の義貞・三峯（福井県鯖江市）の脇屋義助と示し合せて、高経の退路を断りました。

延元三年二月中旬、総大将義貞が廬山から出陣し、高経も国府城から出て、両軍合戦となりました。この時、新田の一

軍が敵陣の後ろへ回ったので、高経は国府を捨てて敗走。義貞は国府城を攻め落とす勢いで、越前国内の城々を攻略。しかし、足利方は足羽七城の本城黒丸城（福井県福井市）にこもって、なおも抵抗を続けていました。

延元三年（一一三八）閏七月二日、この新暦では八月二十四日の暑い盛り、新田義貞は、足羽七城の総攻撃を開始。ところが、七つの城の内、藤島城だけは必死の抵抗で、日暮れ近くになっても攻略できません。そこで、義貞は自ら陣頭指揮を執るため、手勢五十騎ばかりを引き連れ藤島城へ向かいました。その時です突然、横合いから徒歩の敵兵が現れ、盛んに弓矢を射かけてきたのです。たちま

天下の人傑、武略の名将

秀国

Hosoya Umanosuke Hidekuni ●ほそやうまのすけひでくに

新田一族にして、太平記に「天下の人傑、武略の名将」と謳われた知勇兼備の武将、秀国。義貞戦死後、坪谷の地に泉福寺を建立して、新田氏一族一門、そして戦乱に散っていった者たちの冥福を祈り続けた…。

秀国、坪谷の地に泉福寺を建立する

秀国は新田一族一門、そして戦乱に散っていった家臣たちの冥福を祈り続けた

泉福寺 (せんぶくじ)

籠宮山観音院泉福寺は、秀国が坪谷の地に居を構え、出家して「入道弘林」と称したときに建立した寺です。山号の「籠宮」は、丹後国（京都府宮津市）元伊勢籠宮神社から祭った「籠宮」の神号。院号の「観音」は「聖観音像」で観音堂に安置され、寺号の「泉福」は秀国の家臣で戦乱に散った者たちや新田一族一門の黄泉浄土の冥福を祈るために建てた寺という意味です。明治維新後、泉福寺は廃寺となり今は跡を残すのみとなりました。



泉福寺跡 (篠塚坪谷)

籠宮稲荷神社 (このみやいなりじんじや)

籠宮神社は、明治初年の神仏分離令のため泉福寺から分離して坪谷・水立・大黒の共有となり、泉福寺稲荷社とともに、独立した神社となりました。社号は籠宮稲荷神社。現在の社殿は昭和13年に新築されました。奥殿には、籠宮神社と稲荷神社の小宮二座が安置されています。



現在の籠宮稲荷神社 (篠塚坪谷)

籠宮神社 (このみやじんじや)

籠宮神社は泉福寺の山号となり、寺の守護神でもありました。泉福寺とともに南北朝時代から室町時代～江戸時代を経て現在まで、坪谷・水立・大黒の地元守護神として尊崇されてきました。



籠宮稲荷神社の奥殿には籠宮神社と稲荷神社の二座が安置されています。向って左が籠宮神社

聖観音像 (しやうくわんのんぞう)

泉福寺の院号と聖観音像は、江戸時代の宝暦4年(1754)には「西国移し両野三十三所観音霊場」の第七番に指定されました。

聖観音像 (篠塚坪谷)



(御詠歌)
かずかずのあられ
五ちる篠塚に光を放つ
影も頼母し

秀国故国に帰る

坪谷に居を構え出家して弘林と称す

ち配下の兵たちは射倒され、義貞も眉間を射られてあえなく最後を遂げることに。ここに足羽・藤島の合戦は、総大将新田義貞の討ち死により、味方は総崩れとなり幕を閉じることになりました。

新田義貞戦死後、細谷右馬助秀国は再起を図って西に向かい、若狭湾を漁船で西岸に渡り、丹後国与謝郡府中（京都府宮津市）の辺りに身をよせました。この地には丹後国一ノ宮、天橋立・元伊勢籠神社が鎮座しています。「籠神社」は神代の昔、籠舟に神様が乗ってきたという



細谷館跡 (篠塚坪谷) 篠塚のほぼ中央部を南北に走る県道足利赤岩線沿いに細谷館(右馬助館)跡があります

ので、この名があるといわれます。

正平二年（一一三三）、秀国は故国に帰り、邑栗郡佐貫庄篠塚坪谷の地に居を定め、元伊勢籠神社から奉じてきた神霊を祭り、自らは出家して弘林と称し、泉福寺を建立。その没するまで、新田氏一族一門、そして戦乱に散っていった者たちの黄泉浄土の冥福を祈り続けたのです。

